

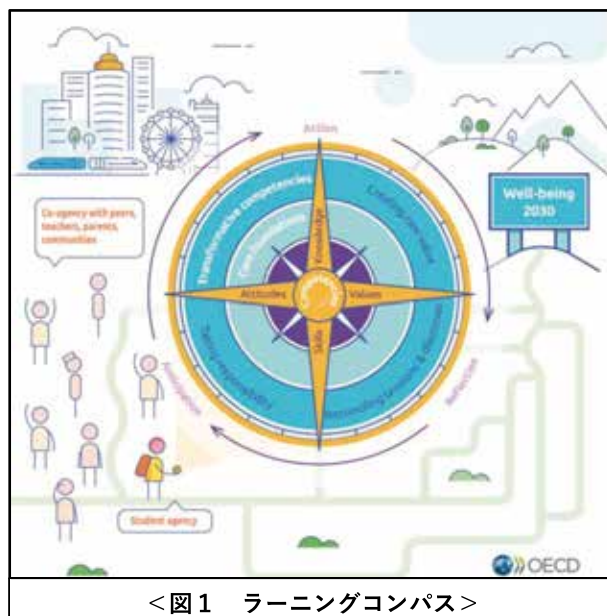
I 研究主題

実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成
～エージェンシーを発揮し AAR サイクルを回す探究的な学びを通して～

II 主題設定の理由

1 研究の経緯

今日の前にいる中学生が成人し社会に出る頃、つまり 2030 年代の未来には、より VUCA（予測困難で不確実、複雑で曖昧）な時代になると言われている。その中には、これまでの傾向からある程度は正しいだろうと予測される変化が存在し、移民や自然災害の増加といった社会の変化や、AI の発達やオートメーション化による経済面の変化、家族形態や健康状態などの個人レベルでの変化がその一例である。「メガ・トレンド」と呼ばれるこれらの傾向を前提に進められてきた OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトでは、「OECD ラーニングコンパス 2030」という名称のレポートを発表している（図 1）。



<図1 ラーニングコンパス>

日本と OECD との二国間プロジェクトとも大きく関わるこのラーニングコンパスでは、ウェルビーイング、3つの変革をもたらすコンピテンシー、AAR サイクル、エージェンシーといった、これからの教育において大切になる、学習の本源的価値が示されている。

令和5年6月に文科省より示された「教育振興基本計画」では、予測困難な時代における教育の方向性として、2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成や、日本社会に根差したウェルビーイングの向上をコンセプトにした、今後5年間の教育政策の目標と基本施策が示されている。その中には、ラーニングコンパスで示された3つの変革をもたらすコンピテンシーともつながる、イノベーションを担う人材育成や、エージェンシーともつながる、主体的に社会の形成に参画する態度の育成なども挙げられており、日本の教育の方向性と OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトとの親和性の高さがうかがえるものとなっている。これらのつながりは、群馬県教育ビジョン（群馬県第4期教育振興基本計画：令和6年4月）にも表れており、最上位目標には「自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて ーひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける『自律した学習者』の育成ー」が設定されている。

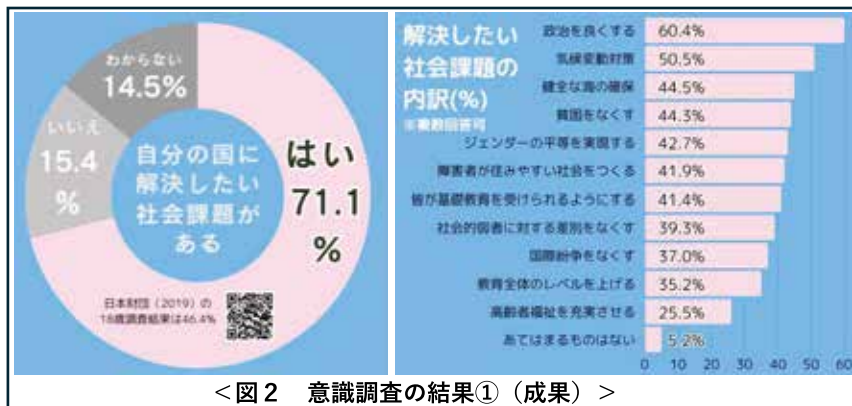
これらの状況を踏まえ、本校生徒に対して、OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトの方針に沿った意識調査（令和6年1月実施）を行った。

自分の国に解決したい社会課題があると考えている生徒は 71.1%であり、これは 2019 年の 18 歳意識調査（日本財団）の日本人の結果 46.4%を大きく上回っている（図2）。また、解決したい社会課題の内訳を見ると、政治をよくする、気候変動対策、健全な海の確保など多岐にわたり、令和4年度から総合的な学習の時間を「未来創造科」として改編して、現代的な諸課題の解決に向けた探究的な学

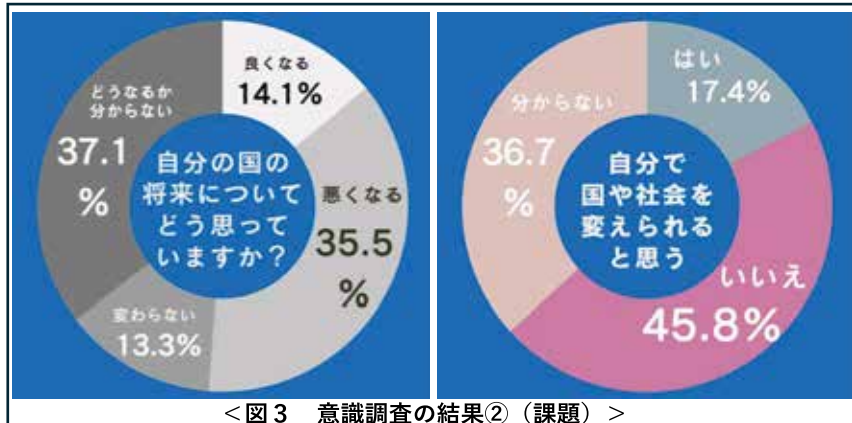
びを通して、これらの課題解決に対する理解や解決意欲などが育成された結果と考える。

一方、日本の将来がよくなると考えている生徒は 14.1%、自分で国や社会を変えられると思っている生徒は 17.4%と少なく、将来に対しての自己効力感の低さが読み取れる（図3）。また、学校や家庭、塾などの学びが、自分の将来の生活の質の向上につながると考えて学習している生徒は全体の約 80%である一方、日本や世界の将来の改善につながると考えている生徒は、自分自身との関わりが遠くなるほど少なくなっていることがわかった（図4）。「自分で国や社会を変えられる」「日本の将来がよくなる」と考える生徒や、「学校や家庭、塾などの学びが日本や世界の将来につながる」という意識の向上は、国や将来に対する自己効力感や目的意識を高め、「何のために学ぶのか」「この学習にどんな意味があるのか」など、自身の学びに対して責任をもって取り組む学習者の育成につながると考える。

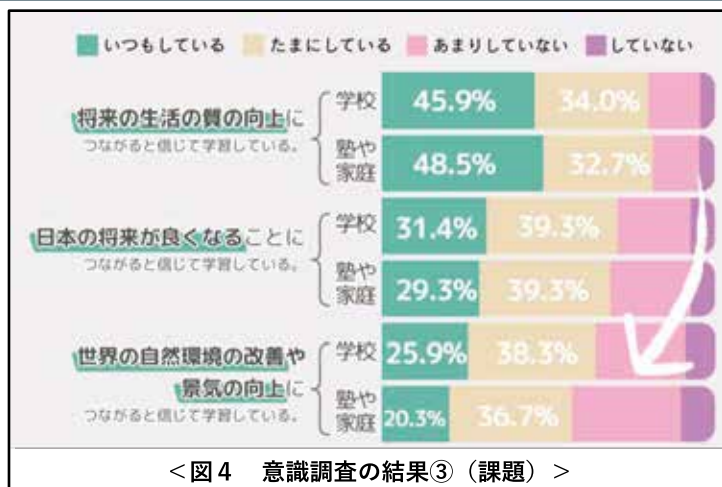
以上の今求められている教育や本校生徒の意識調査などから、生徒が本校の学校目標（図5）を達成し、文字通り「未来を創る」担い手となるためには、自分の将来や日本・世界において**実現したい未来と自身の学習との関係性を十分理解し、自身の学びに対して責任をもって取り組めるようになる必要がある**と考える。また、間違いを恐れて正解や指示を待つ受動的な態度ではなく、**自身の学習方法に目を向け「どのように学ぶか」を考えたり、学び方を振り返って調整したりして、答えのない課題も自分事として挑戦し続けられるようになることも大切だ**と考える。実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することによって、生徒が自身の学習の重要性や価値に気付き、日本や世界の将来に対して能動的に、自ら実現したい未来を創造していこうとする責任あるエージェントになれるだろう。そのためには、各教科や未来創造科を通して、生徒が自らエージェンシーを発揮し AAR サイクルを回す探究的な学びを実践していくことが有効だと仮定し、研究を進めることとした。



<図2 意識調査の結果①（成果）>



<図3 意識調査の結果②（課題）>



<図4 意識調査の結果③（課題）>

共生 心豊かに互いを生かす
創造 知性を高め未来を創る
健康 たくましい心と体に育ち合う

<図5 本校の学校教育目標>

以上の今求められている教育や本校生徒の意識調査などから、生徒が本校の学校目標（図5）を達成し、文字通り「未来を創る」担い手となるためには、自分の将来や日本・世界において**実現したい未来と自身の学習との関係性を十分理解し、自身の学びに対して責任をもって取り組めるようになる必要がある**と考える。また、間違いを恐れて正解や指示を待つ受動的な態度ではなく、**自身の学習方法に目を向け「どのように学ぶか」を考えたり、学び方を振り返って調整したりして、答えのない課題も自分事として挑戦し続けられるようになることも大切だ**と考える。実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することによって、生徒が自身の学習の重要性や価値に気付き、日本や世界の将来に対して能動的に、自ら実現したい未来を創造していこうとする責任あるエージェントになれるだろう。そのためには、各教科や未来創造科を通して、生徒が自らエージェンシーを発揮し AAR サイクルを回す探究的な学びを実践していくことが有効だと仮定し、研究を進めることとした。

Ⅲ 主題・副主題について

1 実現したい未来

「実現したい未来」とは、「自らの可能性を發揮した幸福な人生と、よりよい社会（図5）」だと考える。

まず、生徒や我々が社会の一員である以上、平和で差別がなく経済的にも豊かであるなどのよりよい社会をつくらなければ、実現したい未来には到達できない。また、よりよい社会になったとしても、自分のやりたいこと



<図6 「実現したい未来」のイメージ>

ことができず、自らの可能性を發揮することができないままでは、幸福な人生とは言えないだろう。幸福な人生とよりよい社会が両立することは、誰もが実現したい未来と成り得るのである。

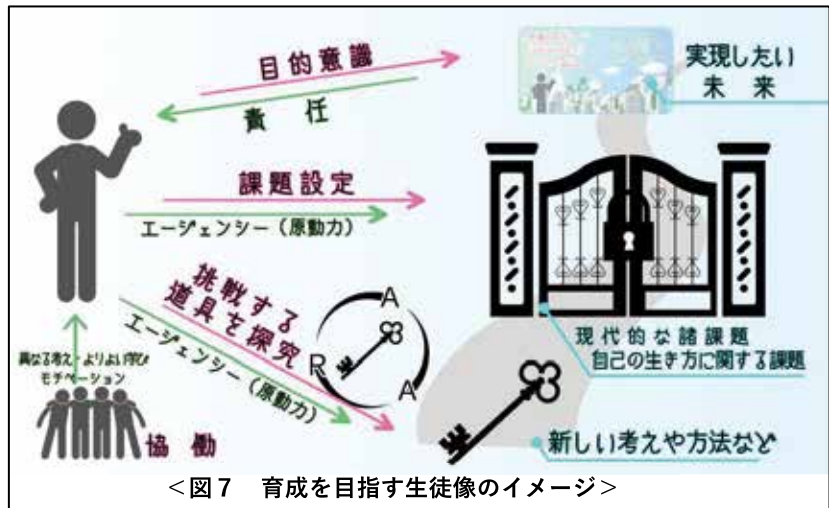
この「幸福な人生とよりよい社会」を両立させるためには、自己の生き方に関する課題や現代的な諸課題などを解決する必要がある。例えば、生徒がなりたい自分になるために進路実現や将来の職業、自分自身の興味や関心などについて考え、自己実現において課題となる事柄を見だし、解決するための資質・能力を身に付けていくことは、自らの可能性を發揮した幸福な人生につながっていくだろう。また、現代的な諸課題を解決するために探究し、実際に提案を行っていく中で身に付く実感を伴った理解や考え方は、よりよい社会を形成していくことにつながるだろう。以上を踏まえ、「実現したい未来」を「**自らの可能性を發揮した幸福な人生と、よりよい社会**」と捉え、研究主題の冒頭に設定した。

2 責任をもって挑戦することができる生徒

様々な事象に対して自ら課題を設定し、協働しながら見通し・行動・振り返りを行うことで、新しい考えや方法を探究し、実現したい未来を創造する生徒

未来とは常に不確実なものである。しかし、より VUCA な時代となる近未来に、生徒や我々が全く無力であるというわけではなく、むしろその未来は我々の手で創っていくものである。

実現したい未来を創造するためには、自己の生き方に関する課題や現代的な諸課題などを解決する必要がある。答えのない様々な課題を探究し解決していくためには、



<図7 育成を目指す生徒像のイメージ>

は、新しい考えや方法などを探究することが不可欠である。新しい考えや方法などを探究することは、複雑な問題を分析し、批判的かつ創造的に考えていく行為だが、自らの実現したい未来に向けた明確な目的意識がなければ、複雑な問題に向き合い挑戦し続けることはできないだろう。**自身の学習と「幸福な人生とよりよい社会」とのつながりを明確にして目的意識をもつことで、複雑な問題に向き合い新しい考えや方法などを探究し続けようという、実現したい未来に対して責任ある行動**が生まれ

るのである。

新しい考えや方法などを探究するためには、自ら課題を設定できることや、他者と協働できること、課題解決に向けて見通し・行動・振り返り（AAR サイクル）を行えることが大切となる。

自ら課題を設定できるということは、実現したい未来に向けて何が必要かを見いだすことができる姿である。不確実な事態に対して課題を設定するには、世の中に存在する様々な事象に対して自ら課題を設定できるようになることが大切である。各教科の授業を通して、自ら課題を設定する力を身に付けていく姿を想定している。

他者と協働できるということは、生徒一人一人のよい点や可能性を生かし、異なる考え方が組み合わせられたよりよい学びを生み出せることである。自分一人では思いつかなかった考えや、課題を解決するためのモチベーションを得ることにもつながる。友人や異学年、他校や地域、専門家など、多様な他者との協働を想定している。

見通し・行動・振り返りを行うということは、生徒が能動的に予測し、生徒の責任において行動に移し、予測に対する行動の結果を振り返るというプロセスのことである。

以上を踏まえて、育成を目指す生徒像を「責任をもって挑戦することができる生徒」として主題後半に設定し、その具体的な姿を「**様々な事象に対して自ら課題を設定し、協働しながら見通し・行動・振り返りを行うことで、新しい考えや方法を探究し、実現したい未来を創造する生徒**」とした。また、各教科では以下のように「目指す生徒像」を設定し、研究を進めることとした。

教科	各教科等における「目指す生徒像」
国語	言葉に関わる問いを基に探究課題を設定して学びに向かい、自分の考えを広げたり深めたりする生徒
社会	平和で民主的な考えから、実現したい未来を切り拓く生徒
数学	数学と実社会を結び付けて自ら探究し続けることができる生徒
理科	自然事象から課題を設定し、自ら AAR サイクルを回して科学的に探究し続ける生徒
音楽	自身と社会と音楽の関係を探究し、自己を確立し続ける生徒
美術	美術と社会の関わりについて探究し、新たな価値を創造することができる生徒
保健体育	運動やスポーツを多様な関わり方で楽しみ、心的エネルギーを獲得できる生徒
技術・家庭	生活や社会を見つめ、理想とする姿に向けて工夫し創造する生徒
英語	よりよい人間関係を築くために表現方法や表現内容を試行錯誤し続ける生徒
道徳	未来への課題を自分事化し、自己のよりよい生き方を考え続ける生徒
未来創造科	実現したい未来に向けて目的意識をもって探究し、振り返りから学びを深める生徒

3 エージェンシーを発揮して AAR サイクルを回す

「**エージェンシー**」を、本校では「**自身の学習に責任をもつことができているとき、発揮される『原動力』**」だと捉えている。OECD のコンセプト・ノート（2019）では、「誰かの行動の結果を受け止めることよりも、自分で行動することである。形作られるのを待つよりも自分で形作ることである。誰かが決めたり選んだことを受け入れるよりも、自分で決定したり、選択することである。」と説明している。OECD と文科省の両方の立場からプロジェクトに関わっている白井（2020）は、「**エージェンシーを構成する要素**」を整理している（図1）。エージェンシーはア

<表1 エージェンシー・AAR サイクルの構成要素>

「エージェンシー」「AAR サイクル」を構成する要素 (本研究の焦点はハイライト)	
「エージェンシー」	
・アイデンティティ	・帰属意識
・モチベーション	・希望
・自己効力感	・成長志向の考え方
「AAR サイクル」	
・能動性	・他者視点の獲得
・批判的思考力	・省察的思考力

イデンティティや帰属意識の発達に関わるとされており、これらの発達は自己の生き方に関する課題を解決し、幸福な人生の実現につながると考える。また、エージェンシーを発揮して行動するためには、モチベーション、希望、自己効力感、成長志向の考え方が必要とされているため、本校ではこの4つに焦点を当てて授業改善を図り、生徒がエージェンシーを発揮し AAR サイクルを回せるようにしていく。

「**AAR サイクル**」とは、見通し・行動・振り返り（Anticipation - Action - Reflection）のサイクルのことである。OECD のコンセプト・ノートでは、AAR サイクルは、エージェンシーや変革をもたらすコンピテンシーを育成するための触媒であるとされている（白井、2020）。本校では、新しい考えや方法などを探究するための手段の一つとして位置付けているが、同時にエージェンシーの育成についても期待しているものである。AAR サイクルを構成する要素には、能動性、他者視点の獲得、批判的思考力、省察的思考力などが挙げられている（表1）。

「**見通し**」とは、物事を他視点的に考え、その後の行動（または行動しないこと）の結果について予測することであり、能動性や他者視点の獲得が必要となる。自己の生き方に関する課題や現代的な諸課題などは漠然とした遠いものであり、それに対してこの「見通し」とは、行動の結果をある程度予測できる明確なもので、行動に移すモチベーションを生じさせる。なお、PDCA サイクルの「Plan（計画）」との違いとして、この見通しは、行動と振り返りの結果によって大きく変更されることも許容している。

「**行動**」とは、言葉の意味の通りで、予測したことを行動に移すことである。課題を解決するための行動であり、能動性があるからこそ行動した当事者に責任が生じるものである。また、責任をもった行動では、行動している最中にもその場で振り返りが同時に行われることもあり、省察的思考力があれば、予測と行動を調整したり改善したりすることができる。

「**振り返り**」とは、自身や他者の行動を批判的に考え評価し、次の行動の改善につなげていくためのものである。行動の結果を評価していくことは、自身の行動がどのような影響を与えたかについて考えることにもなり、エージェンシーの要素でもある自己効力感や将来への希望などの基盤となったり、新たな見通しへのモチベーションを生じさせたりすることにつながる。

以上のことから、主題を達成するためには、実現したい未来への明確な目的意識をもってエージェンシーを発揮し、AAR サイクルを回して新しい考えや方法などを探究することが有効だろうと仮定し、各教科等で実践する手立てとして副主題に設定した。

4 探究的な学び

中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編では、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていくことを探究的な学習と呼び、一連の学習過程を課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現、の4段階をサイクルとして回し続けていくものとしている。また、特別の教科道徳編では、「新しい考えや方法を生み出そうとすること」「積極的に新しい分野を切り開いていこうという意欲」のことを探究の精神としている（A(5) 心理の探究、創造）。さらに理科編では、課題の設定、検証計画の立案、観察・実験の実施、考察・推論などの学習過程例を探究の過程としている。「探究」について多少の文言の違いはあるものの、**一連の学習過程を経て新しい考えや方法などを生み出すという意味の言葉**として扱っていることが分かる。

田村（2017）は、探究のことを「一連の問題解決が連続的に、発展的に繰り返されていくとともに、その過程において自己の生き方を問い続けることにつながっていくことが、基本的なイメージ」と言

及している。探究に終わりはなく、そのプロセスの中で自分の考えを更新したり、自分とは何かを考えたりして、自己の生き方に関する課題や現代的な諸課題を解決していくものと捉えることができる。

以上のことから、「探究」とは、「**課題の設定を始めとした一連の過程を経て、自己の生き方を問い続け、新しい考えや方法などを生み出し続けること**」であると考え。生徒が自らエージェンシーを発揮しAARサイクルを回せるよう授業改善を図ることが、「探究的な学び」の実現につながると考え、主題達成のための手立てとして副主題に設定した。

IV 探究的な学びを実現するための具体的な手立て

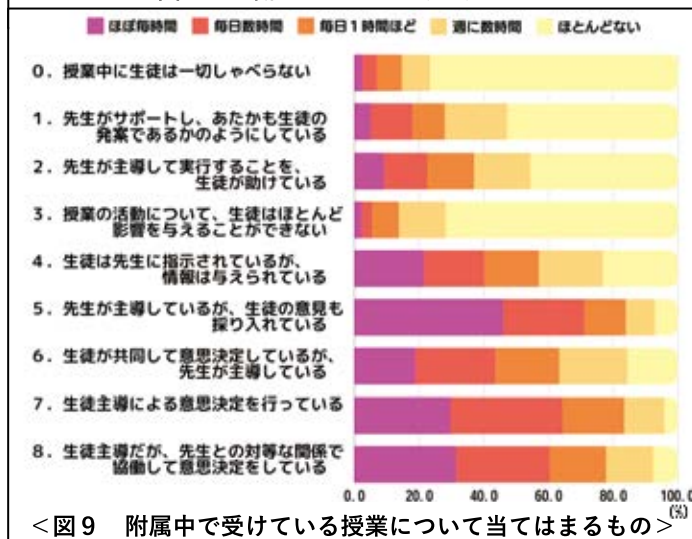
1 課題の明確化

OECDの「共同エージェンシーの太陽モデル(図8)」を基に作成した本校の授業に対する質問紙調査を令和6年1月に実施した(図9)。生徒の多くは、質問項目の0~3のように教師主導で生徒が受動的な授業は少ないと考えている。また、質問項目7, 8のように、60%以上の生徒が毎日数時間以上は生徒の意思決定で授業を行っていると考えている。

一方、質問項目5にある通り、71%の生徒が毎日数時間以上は先生が授業を主導していると考えている。生徒が自ら、あるいは協働しながら一連の過程をデザインできているかどうかは、生徒が自らエージェンシーを発揮し探究的な学びに向かっているか、延いては実現したい未来に向けて責任をもって挑戦しているかの一つの指標となるだろう。

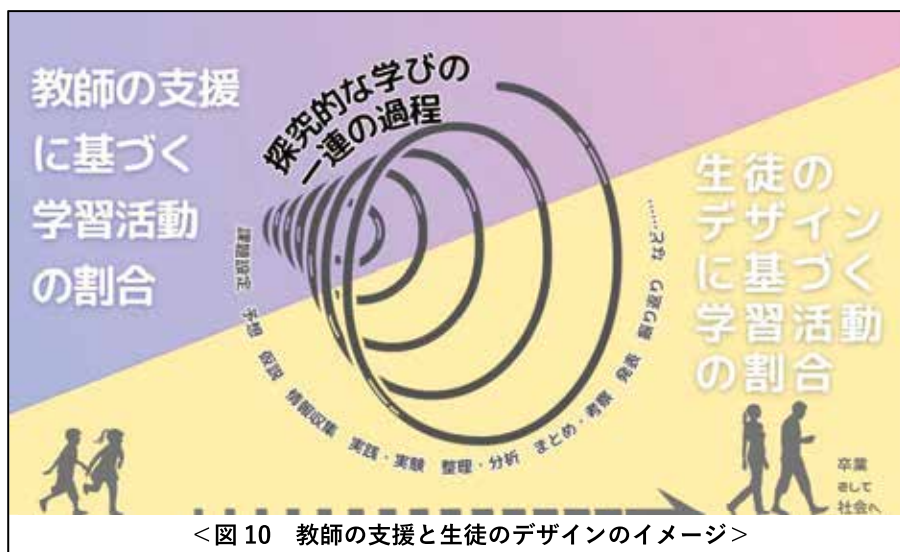
生徒が自ら、あるいは協働しながら一連の過程をデザインできるようにするためには、現状、生徒は何を意思決定し教師が何を主導しているのかを明らかにする必要がある。各教科の授業を教員が分析した結果、**特に課題設定の場面において教師が主導しており、生徒に委ねることに難しさを感じていることが分かった**。課題の設定が教師主導になりがちな理由として、教師が単元や題材で身に付けさせたい資質・能力を明確にもっていることや、どのような課題が各教科の良質な課題かを、生徒が知らない状態であることが考えられる。課題が探究的な学びに向かうために必要な要素を備えているか、教科の特性を踏まえた必要なサイズであるかなど、**各教科の良質な課題について、教師と生徒が明確な共通認識をもてる**ようにしたい。

生徒が自ら良質な課題を設定できるようにするためには、教師の支援に基づいて課題設定する経験を積み、少しずつ生徒の力で課題設定ができるようにしていくことが大切だと考える。義務教育の出



口である中学校段階としては、教師の支援に基づく学習活動の割合を段々と減らし、生徒のデザインに基づく学習活動の割合を増やすとともに、生徒が自ら課題設定が行えるようにしていきたい（図10）。

以上を踏まえて、本研究では次のように各教科の課題を整理した。実践研究を進めながら、生徒が探究的



<図10 教師の支援と生徒のデザインのイメージ>

な学びに向かうことのできる良質な課題とは何かを検証し続け、生徒自身の力によって良質な課題を設定できるようにするための手立てを、各教科で実践していく。

【考 え 方】

- ・課題のサイズ感（単元・題材／単位時間／数時間共通など）は教科特性によって異なる。
- ・課題を見れば、“生徒が探究的な学びに向かうことができるもの”にする。
- ・教科特性によっては、学習方法も含まれる可能性がある。

	課 題 例	サイズ	課題設定に必要な要素
国語	①作品の「視点」に着目しながら登場人物の言動の意味を考えて、②『走れメロス』をリライトしよう。	単元	①指導事項 ②言語活動
社会	②これからのEUは①どうあるべきか。	単元	①疑問詞（なぜ・どのように） ②社会的事象（抽象的に）
数学	①データの分析には②どのような方法があるか③。	小単元	①単元名 ②どのような概念、方法、活用、意味、特徴、性質などの言葉 ③疑問形
理科	①浮力の大きさは②何によって決まるのか③。	1～3時間共通	①自然の事物・現象 ②6パターンの探究内容 ③疑問形
音楽	①「旅立ちの日に」の合唱で、②卒業式を忘れられない宝物にするためには、③歌詞と音楽（強弱・音の重なり・構成など）をどのように関わらせて工夫すればよいだろうか④。	題材	①音楽活動の場や、曲名・ジャンル名 ②音楽表現や鑑賞で生み出したい、この場の価値 ③【表現】分野に応じた活動（要素を含む） ④疑問形 ③④【鑑賞】要素＋行動目標
美術	①分かりやすさと美しさとの調和を考え、②郷土の魅力を伝える③菓子のパッケージデザインを表現しよう。	題材	①表現活動や鑑賞の条件 ②表現活動や鑑賞の目的 ③表現活動の方法（学習方法）
保健体育	①理想とする動きに近づいたり、勝敗を争ったりして運動やスポーツを楽しむためには、②どのような課題を解決すればよいだろうか。	単元	①活動の目標・目指すべき姿 ②目標を達成するための問い
技術・家庭	<技術分野> ①整理整頓するために、②どのような本棚を製作するとよいのだろうか③。	数時間共通(個人)	①解決したい問題 ②解決方法 ③疑問形
	<家庭分野> ①持続的に使うことができる②あずま袋にするためには、どうしたらよいだろうか③。	題材	①学習の目的 ②題材 ③疑問形

※6パターンとは、関係性、要因、変化の仕方、手段、性質やつくり、共通点と相違点

英語	①海外に住む、日本の伝統行事に興味があるALTのお母さんに、③日本のお正月の過ごし方についてよく知ってもらえるように、④内容のまとまりを意識しながら手紙を②書こう。	単元	①英語を使う（コミュニケーションを図る）必然性のある目的や場面、状況等がある。 ②活動目標（～しよう）である。 ③3つの話題を踏まえている。 ④5領域（聞く、読む、話す〔やり取り、発表〕、書く）を踏まえている。
道徳	①友情を築くために②大切なものは何だろう？	本時	①内容項目 ②道徳性の諸様相
未来創造科	※一人一人が探究する内容を定める授業内容のため、他教科と性質が異なり、一つのを定めることが難しい。		

2 各教科等の手立て

各教科等における目指す生徒像に迫るための「探究的な学びを実現するための具体的な手立て」として、**生徒が自ら課題を設定できるようにするための手立てと、エージェンシーを発揮してAARサイクルを回すための手立てを設定した。**各教科等の手立ては以下の通りである。

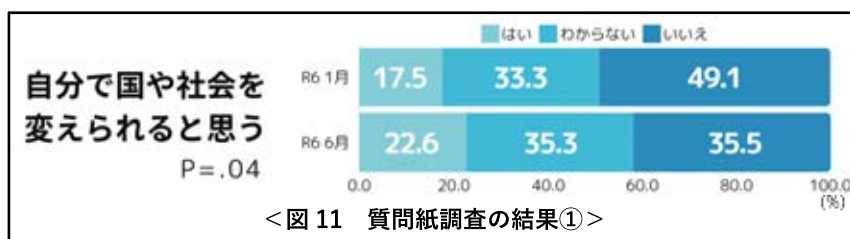
教科	探究的な学びを実現するための具体的な手立て
国語	(1) 生徒一人一人がもつ問いと既習事項を結び付け、探究課題へと練り上げる「SVシート」の活用 (2) メタ認知を促し、学びを調整する「学びの足跡シート」の活用
社会	(1) 「平和で民主的な考え」を基に自ら課題設定するための「分野課題」 (2) 批判的思考を磨くための「場の工夫」
数学	(1) 単元全体を見通した問題の提示と課題の設定 (2) 「振り返りシート」を活用した「疑問解決タイム」
理科	(1) これまで探究した課題を類型化した「探究VIパターン」の作成と活用 (2) 探究の様々な場面で試行錯誤できる時間を保障する「CYT（ちょっとやってみるタイム）」の実施
音楽	(1) 生活場面から課題設定する「ミュージッキングカード」の活用 (2) 学年ごとの創作課題「サウンドデザインタイム」の設定
美術	(1) 美術と「よりよい社会」の関わりを探究するための「アート&ライフタイム」の設定 (2) 題材全体を見通すことができる探究シートの活用
保健体育	○ AARサイクルを促すOPP（One Page Portfolio）の工夫
技術・家庭	(1) 「理想とする姿」に向けた課題の設定 (2) 「みんな〜タイム（試しの時間）」の活用
英語	(1) 「Study Plan Sheet」を用いた単元における自分の課題を設定する場の設定 (2) 「新附中 Can-Do シート」を活用したフィードバック
道徳	(1) 未来への課題を自分事化し、探究する課題を設定するための学習過程のデザイン (2) AARサイクルを回すための「心の旅」の設定
未来創造科	(1) 「自己の生き方」を踏まえた探究を行う、未来創造科クロスMAPの作成 (2) 探究の各過程と過程全体での学びを振り返る (3) 生徒運営型の授業づくり

V 研究のまとめ

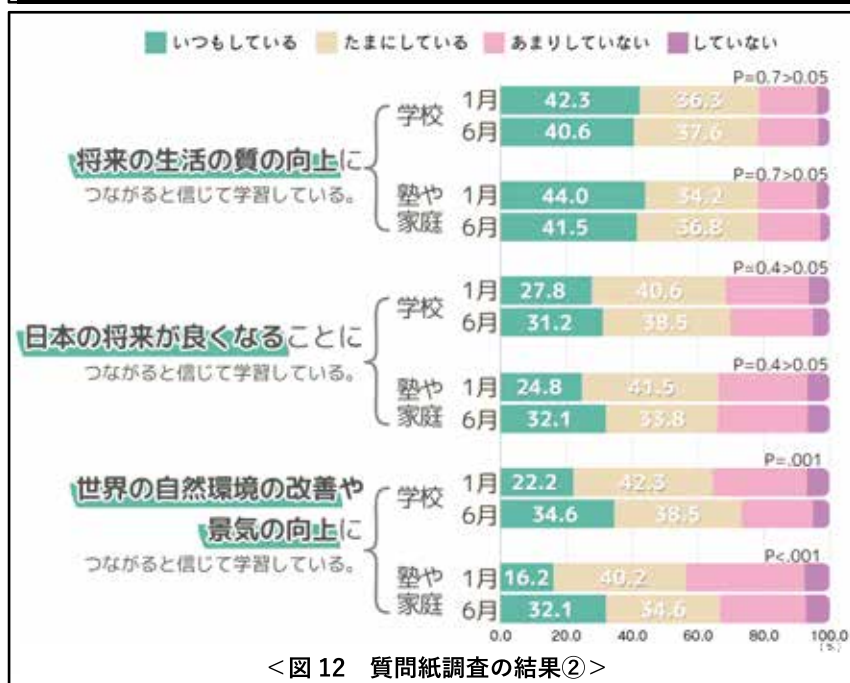
1 研究の成果と2年次への課題

実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成を目指し、エージェンシーを発揮しAARサイクルを回す探究的な学びを実現するために、各教科等で育成したい生徒像を設定し、具体的な手立てを講じて実践研究を進めてきた。各教科等の成果と課題については、それぞれの論でより深く考察するため、後掲の各論を参照されたい。ここでは令和6年6月に実施した意識調査をもとに成果と課題を示し、考察する。

成果として、令和6年1月と6月の同一生徒（第2、3学年）への調査の結果について符号検定を行った結果、自分で国や社会を変えられると思う生徒が増加した（ $P=.04$ 、図11）。各教科等でエージェンシーを発揮できるようにするために、各教科等の学習と「よりよい社会と幸福な人生」とのつながりを明確にした授業実践を行ってきたことが、少なからず影響しているものと考えられる。加えて、学校や家庭、塾などの学びが、世界の自然環境の改善や景気の向上につながると考えて学習している生徒も増加した（ $P<.001$ 、図12）。自身の将来の生活の質の向上については増加が見られなかったものの、各教科等において、特に「よりよい社会」に向けた目的意識をもって学習することができた成果であると考えられる。また、塾や家庭での学習についても同様の増加がみられることから、学習に対するエージェンシーが学校外の学習においても発揮されているものと考えられる。以上のことから、本研究の手立が実現したい未来に向けて責任をもって学習に取り組む生徒を育成することへの一助となったと考える。



< 図11 質問紙調査の結果① >



< 図12 質問紙調査の結果② >

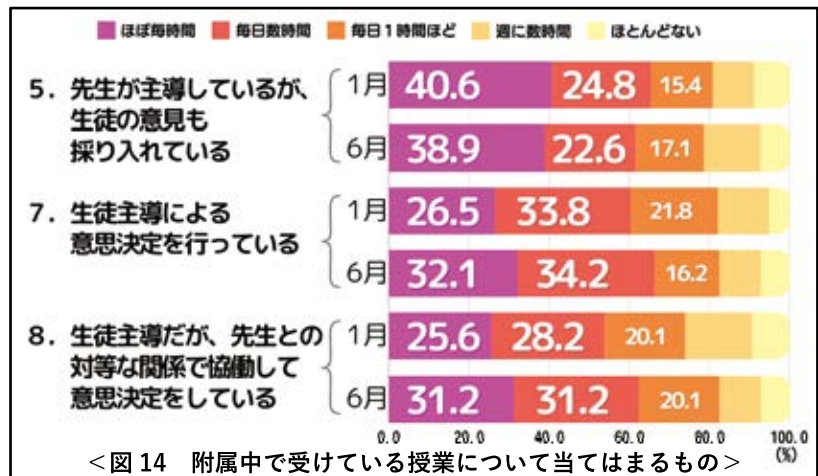
課題として、日本の将来が良くなることにつながると信じて学習している生徒の増加は見られなかった（ $P=0.4$ 、図12）。また、自分の国の将来について生徒の意識に変化は見られなかった（ $P=0.7$ 、図13）。図13の内訳を見てみると、「変わらない」「どうなるか分からない」が合計5.6%減少し、「良くなる」が0.8%、「悪くなる」が4.7%増加している。これは、実現したい未来とのつながりを意識した学習の結果、漠然としていた日本の将来に対する見通しをもち、「悪くなる」と結論づけた生徒が増加したのではないかと考える。自身の学習が実現したい未来とつながっており、世界の将来の改善につながると考えている一方、自国の将来について「良くなる」と思っていないことから、自身の学習が「本当に」国や社会を変えられるという実感が伴っていないのではないかと推察する。中学生が実際の社会に対して影響を与え自己効力感を獲得することは容易ではないが、より実践的な学習活動の開発や未来創造科における実践を通して、自国の将来に対する自己効力感の向上を目指していきたい。現実の不確実で複雑な問題に向き合い、批判的かつ創造的に考え挑戦し続けていくためには、自国の将来に対する希望や自己効力感是不可欠であり、今後の研究において向き合っていかなければならない課題だと考える。



< 図13 質問紙調査の結果③ >

2 今後の展望

先述の成果を基に、明らかになった課題を解決し「実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒」を育成していくためには、生徒自身が一連の過程をデザインする探究的な学びの実現が鍵となるだろう。太陽モデルを基にした質問紙調査の結果では、「教師主導」の質問項目5は微減、「生徒主導」



の質問項目7, 8は微増となったものの、どちらも更なる向上が期待できるものである(図14)。今年度は「課題の設定」に着目して、生徒のデザインに基づく学習活動の増加を目指してきたが、生徒や教師がどの探究の過程に対して困難さを抱えているのかを明らかにし(その中には、実際の社会に対して影響を与え自己効力感を獲得する「実践」も含まれてくるだろう)より一層生徒がエージェンシーを発揮しAARサイクルを回すことができる手立てを検討していく。成果と課題を2年次に向けての研究に生かすとともに、今後も研鑽を積み、諸先生方のご指導、ご助言を賜りながら更に研究と実践を重ねていきたい。

<参考文献>

- 群馬県教育委員会(2024)『群馬県教育ビジョン(群馬県第4期教育振興基本計画)』
- 群馬県教育委員会(2024)『エージェンシーを発揮するための学びを推進するリーフレット』
- 白井 俊(2020)『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来』 ミネルヴァ書房
- 田村 学、廣瀬 志保(2017)『『探究』を探究する』 学事出版
- 御手洗 明佳、赤塚 祐哉、井上 志音(2023)『国際バカロレア教育に学ぶ授業改善』 北大路書房
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領解説(総則編・理科編・道徳編・総合的な学習の時間編)』 東山書房
- 文部科学省(2023)『教育振興基本計画』